九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

十七世紀前半、福建沿海の海商と海寇 : 漳州・泉州地域を中心として

白井, 康太
九州大学大学院人文科学府

https://doi.org/10.15017/25862

出版情報：九州大学東洋史論集. 38, pp.72-98, 2010-04-30. 九州大学文学部東洋史研究会
バージョン：
権利関係：

十七世紀前半、福建沿海の海商と海寇
―漳州・泉州地域を中心として―

白井　康太

はじめに

一五六〇年代末に、福建南部の海澄県から東南アジア各地への渡航が解禁されると、福建海商は東南アジア海域で活発な貿易活動を展開した。一方、日本への渡航は依然として禁止されていたが、実際には日本との密貿易を行う福建海商も稀ではなかった。さらに十七世紀に入ると、オランダ東インド会社が東アジア貿易に進出し、一五二〇年代には澎湖諸島や台湾を拠点として、福建と平戸を結ぶ日明間の中継貿易に乗りだすことになる。このような海外貿易の拡大の中で、福建南部の漳州府・泉州府を中心として、合法的な東南アジア貿易に従事する海商だけではなく、日本やオランダ勢力と結びつき、密貿易にくわえて場合によっては海賊行為も行う、明朝当局から「海寇」と呼ばれるような海上勢力が成長してゆく。

こうした明末福建沿海の海商／海寇勢力については、日本では岩生成一氏・永積洋子氏・松浦章氏などの研究がある。特に岩生氏は、一六二〇年代の代表的な福建海商である李旦の事績について詳細な検討を加え(1)、また永積氏は一六二〇～四〇年代における、李旦・鄭芝龍とオランダ東インド会社との貿易交渉や紛争のプロセスを詳しく論じている(2)。ただし両氏の研究は基本的にオランダ史料に基づいており、関連する中国側の漢文文献はほとんど参照されていない。

一方、中国や台湾では、鄭芝龍・鄭成功父子をはじめとする、明末清初の東南沿海における海商・海寇についての研究が活発に行われている。特に林仁川氏は、明末清初に東南沿海において私貿易に従事したさまざまな海商／海寇集団を包括的に分析し(3)、張増信氏も、十六世紀後半から十七世紀初頭にかけての、東南沿岸の海寇勢力の活動と興亡について詳細に論じている(4)。また中国沿海における「海盗」の活動を通史的に叙述した鄭広南氏も、明末福建の海寇勢力について概括的な検討を加えている(5)。また日本では、松浦章氏が『明実録』などから明代の「海盗」に関する史料を体系的に収集し、明末の海商／海寇勢力について通史的に概観している(6)。

上記のような諸研究によって、特に林道乾・林鳳・李旦・鄭芝龍・鄭成功といった、明末清初の代表的な海商／海寇勢力については、その活動の実態と興亡の過程がかなり詳しく明らかにされている。ただし明末の東南沿海、特に福建南部の漳州・泉州地域では、上記のような著名な海上勢力のほかにも、多様な海商／海寇が恒常的に活動しており、こうした海上勢力の勢力範囲・貿易活動・集団構造などの実態面については、必ずしも明らかにされていない。またこうした海商／海寇集団と、沿海地域社会や明朝海防当局との複雑な相互関係や人的ネットワークについても、なお十分には論じられていない。

このため本稿では、従来の研究では必ずしも注目されてこなかった、十七世紀前半の福建南部におけるいくつかの海商／海寇集団に注目して、その貿易活動や人的結合の実態、沿海社会や海防当局との相互関係について、分析を試みることにしたい。以下第一・二章では、特に天啓年間に、李旦の没後から鄭芝龍が台頭する時期にかけて、福建南部においてもっとも有力な海上勢力であった許心素について検討を加え、さらに第三章では、鄭芝龍が東南沿海における覇権を確立する崇禎年間に、福建南部で活動した李魁奇・鐘斌・劉香などの海上勢力に焦点をあてる。こうした海商／海寇集団については、漢文史料のほか、『バタヴィア城日記』などのオランダ史料にも有用な記事が残されており、本稿ではこうした史料群を活用して、当時の海商／海寇の実態や人的ネットワークを、できるだけ多面的に検討することを試みてみたい。

一　許心素の台頭とその活動
―天啓年間、福建南部の海商／海寇―

（1）　許心素の登場とその貿易活動

一六二〇年代の東南沿海では、海商／海寇勢力の活動が急速に活発化した。この時期には明朝による日本貿易の禁止がしだいに弛緩して、福建―日本間の密貿易が急速に拡大するとともに、オランダ東インド会社が東アジアに進出し、福建南部と九州を結ぶ中継貿易に乗り出した。こうした対日貿易は、あくまで非合法な密貿易であり、商船は武装船団を組んで航海を行う必要があり、さらには沿海や海上において海賊行為や略奪などを行う場合もあった。このような海商と海寇の性格をあわせもつ海上勢力が、一六二〇年代以降、福建南部の漳州府・泉州府を中心に発達したのである。

オランダ東インド会社はまず一六二二年に澎湖諸島を占拠したが、一六二四年に台湾南部の安平に根拠地を移し、そこにゼーランディア城を築いて、東アジア貿易、特に福建南部と日本を結ぶ中継貿易の拠点とした。彼らはまず華人海商に資金を前貸しし、福建において生糸・絹織物などの中国産品を仕入れさせた。そして、華人海商が仕入れた中国産品を平戸や長崎に運びこみ、日本産の銀を獲得していた。こうして東インド会社は東シナ海域において、福建南部の漳州湾から、台湾（安平）を介して、平戸や長崎を結ぶ中継貿易ルートを構築したのである。こうしたオランダによる日明中継貿易のパートナーとなったのが、福建南部の海商／海寇勢力であった。

オランダ東インド会社と結びついて海上貿易を展開した福建南部の海商のなかでも、まず一六二〇年代前半に頭角を現したのが、李旦と顔思斉であった。李旦・顔思斉は、それぞれ大規模な海商集団を統率下に置き、福建と平戸・長崎との中継貿易を基軸として、オランダ東インド会社とも結びついて、東シナ海域において活発な貿易活動を展開したの

である。

当時アジア海域におけるオランダ東インド会社の本拠は、ジャワ島のバタヴィアにあった。バタヴィア総督府が東インド会社関連の諸事件や、各地の商館からの報告やバタヴィアに来航した海商から得た情報などを日記体で記録した基本史料が『バタヴィア城日誌』(7)である。『バタヴィア城日誌』一六二五（天啓五）年四月六日の条には、李旦と「シムソン（simson）」すなわち許心素との関係について、次のような記事がみえる。

我等はワンサン（黄合興）に、シムソンsimson（許心素）はいかなる人なるかと問いしに、彼はこれに答えて、シナカピタン（李旦）の親友にしてその大いに信頼する者なり。同人は前にシナカピタンのため艱難を嘗め、牢獄に入りしことあり。シナカピタンが我等の事につき尽力して成功を収めたる後、再び自由を得たるが、同人はシナカピタンの事一切を取り行なう人なりと言えり(8)。

とある。これによれば、許心素とは主として平戸に在住する李旦の代理人として、中国沿岸においてその貿易や交渉を代行していたことがわかる。

許心素については、すでにJohn E. Wills氏・張増信氏・永積洋子氏・楊国禎氏などが論及し、彼が厦門を中心とした漳州湾沿岸に拠点を置き、オランダ東インド会社とも結んで一六二〇年代に福建沿海で海上貿易を展開した、有力な海商／海寇であったことが指摘されている(9)。ただし総じて、許心素の貿易活動の実態や、沿海地域社会との関係については、先行する李旦や後に続く鄭芝龍の陰に隠れて、十分に検討されていない。楊国禎氏は鄭芝龍登場の前史として、許心素と福建海防当局や沿海社会との関係について簡略に言及しているものの(10)、この問題については、より多くの史料を活用してさらに具体的な検討を加える価値があるだろう。以下本稿では、許心素に関連する漢文史料をできるだけ網羅的に検討するとともに、オランダ史料も参照して、彼の活動とその社会的背景を、時系列的に整理してより詳しく叙述することにしたい。

さて、許心素が史料中に登場するのは、以下に紹介する二つの史料からである。まず、『バタヴィア城日誌』の一六

二六（天啓六）年四月九日条には、それに先立って、一六二五（天啓五）年に許心素とオランダ船が行った取引について、次のような記事がある。

船頭の報告によれば、オランダのスヒップ船二隻、タイオワンを発してチンチュウ川（漳州湾）に入り、厦門に現れたり。前年我が国人がシムソウsimsou（許心素）という中国人に交付したる四万レアル・ファン・アハテンの金額に対し、タイオワンにおいて渡す約束の生糸を請求するためなり(1)。

これによれば、許心素はオランダ東インド会社から四万レアルもの資金を前貸しされ、中国本土で生糸を仕入れて、台湾に運んでオランダ側に引き渡すことになっていた。ところが許心素は所定の期日になっても生糸を引き渡さないため、オランダ船が彼の拠点であった厦門に来航して、生糸の引き渡しを請求したのである。さらにこの記事には、続けて次のようにある。

また右シムソウは福州に連れ行かれしが、彼が約束を履行せざりしによりオランダ人がスヒップ船にて再び中国に来たりしを理由として、彼より数千レアルを搾取せんためなり。右船頭の言うところによれば、中国においては我らのため生糸数千ピコルを準備しある由なり(2)。

これによれば、一六二五（天啓五）年に、許心素は福建当局によって身柄を拘束され、福州に連行されたという。その原因は、許心素がオランダ勢力に生糸を引き渡す約束を履行せず、オランダ船が契約の履行を求めて中国に再来航したためであった。福建当局は、許心素の契約不履行がオランダ船の福建来航を招いた責任を理由として、彼から数千レアルの財貨を徴収しようとして、福州に彼を連行したのだという。以上の『バダヴィア城日誌』の記事については永積氏も検討を加えており、許心素が契約を履行しないことに対し、オランダ東インド総督は強い不満を抱いていたとしている(3)。

この事件については、漢文史料にも関連する記事が残されており、その後のいきさつを知ることができる。すなわちオランダ勢力が澎湖諸島から台湾に拠点を移した後、天啓五（一六二五）四月に、福建巡撫南居益は「条陳澎湖善後事宜」

という題奏を行い、福建沿海における海寇集団・「倭寇」・オランダ勢力による密貿易対策について提言した[14]。この題奏には、「李旦が信頼している許心素という人物を、現在拘留している」という一節があり[15]、『バダヴィア城日誌』も伝えるように、この当時実際に許心素が福建当局によって、福州において身柄を拘束されていたことが確認できる。

さらに南居益は、この題奏で、福建の海寇集団・「倭寇」・オランダ勢力との結びつきについて、次のように指摘している。

姦人が群れて倭人や紅毛夷に付き従い、倭人を導いて紅毛夷を助け、紅毛夷を引き込んで倭人に接触させている。紅毛夷は交易で手に入れた中国産品を、ことごとく倭寇に贈っている。また、倭人は我が国の産品を入手するために、尽力して紅毛夷を助けている。そして倭人と紅毛夷は海寇と合流して、犯すことのできない勢いとなっている[16]。

福建沿海では海寇集団が「倭寇」や「紅毛夷」（オランダ人）と結託して密貿易を行い、中国産品を日本に供給し、かつ彼らが一体化して海賊行為を行っているというのである。

さらにこの題奏によれば、福建沿海の海防を統括する福建総兵の俞咨皋が、南居益に対し次のような海寇対策を提言したという。この俞咨皋は、一五六〇年代に戚継光とともに、後期倭寇鎮圧に大きな功績を挙げた、福建総兵俞大猷の子である[17]。

泉州出身の李旦は、久しく日本に滞在し事に当たっている。李旦が信頼している許心素を現在拘留しており、もし許心素の子を人質として、許心素を李旦の元へ派遣し、功績を立てて贖罪するように説得すれば、李旦は我々に従い、紅毛夷は孤立するだろう[18]。

ここで俞咨皋は、平戸の華人商人の頭目として、オランダ東インド会社による日明中継貿易の、日本側のパートナーとなっている李旦を、明朝に帰順させることによって、オランダ勢力を孤立させるという方策を提案している。そしてそのために、李旦の信任の厚い許心素を、その子を人質とした上で李旦のもとへ派遣し、李旦が明朝に帰順するように説

得させ、それによってオランダ勢力と海寇たちとの密貿易を遮断し、オランダ勢力を孤立させようというのである。

この題奏によれば、南居益はこの俞咨皋の提案を採用して、李旦の招撫を実行に移したという。南居益によれば、それによって李旦や許心素は明朝に帰順し、孤立したオランダ勢力は澎湖諸島から退去して台湾へ移ったとされる[19]。ただし『バダヴィア城日誌』一六二五(天啓五年)四月九日の条では、南居益の題奏とは逆に、李旦がオランダ勢力との交渉を斡旋するために、許心素を福建巡撫のもとへ派遣したという記事がある[20]。

なお李旦は明軍に帰順してまもなく、天啓五(一六二五)年八月に、本拠であった平戸で死亡した[21]。そして許心素は、頭領であった李旦の死により、彼が掌握していた福建南部における海上貿易の基盤を継承することになる。このころ、許心素は三〇隻以上のジャンクをマニラに派遣しており[22]、海上貿易に積極的に従事していたことを窺い知ることができる。ただし、許心素が継承した基盤は、平戸を中心とする東シナ海域一帯に及ぶものではなく、漳州湾一帯を中心とした、福建南部地域に限定されていたようである。

やがて平戸や長崎などにおける李旦の基盤は、平戸において李旦の配下にあってオランダ人との折衝にも当たっていた、鄭芝龍によって掌握されていくことになった。その後鄭芝龍は、さらに福建沿岸や台湾における顔思斉の貿易基盤も勢力下に収めて、しだいに東シナ海全域にわたる広範な貿易ネットワークを形成してゆくことになる[23]。こうして李旦の没後は、彼が掌握していた東シナ海域の貿易利権を、福建南部の漳州湾・厦門を主要拠点とする許心素と、平戸を主要拠点とする鄭芝龍が分割するような形勢になっていった。その後はこの両者が、李旦の残した東シナ海域貿易の掌握をめぐって、対抗をつづけることになる。

(2) 許心素と海防当局・海寇集団・沿海社会

李旦の没後、許心素は彼の基盤を受けつぎ、厦門を拠点として、福建南部におけるもっとも有力な海商／海寇として

台頭していく。それでは、彼は明朝の海防当局、他の海寇集団、そして沿海地域社会とどのようなかかわりを持っていたのだろうか。

まず、許心素と海防当局のかかわりについて検討しよう。李旦の没後も、許心素は引き続き福建の海防当局との結びつきを保ち、天啓六（一六二六）年には、李旦の帰順に貢献した功績により、明軍から水師把総（総兵の管轄下にある中級武官）の官職に任じられている[24]。

さらにこの年には、江西道監察御史の周昌晋が題奏して、許心素に関して次のように述べている。

天啓六年、私が福建に着任したところ、四月には楊六・楊七が海上を横行し、わが兵船を燃やした。その討伐を提議したところ、兪咨皋は奸棍の許心素の計略を聴き入れ、楊六・楊七を誘って降伏させた。福建巡撫朱欽相は便宜的措置として（楊六らに）他の海寇を討たせて贖罪させようとしたが、私は慄然としてこれを憂いた[25]。

すなわち、一六二六年四月、福建で勢力を拡大していた海寇集団の頭領である、楊六・楊七が沿海を横行し、明軍の兵船を攻撃したのに対し、許心素は福建総兵兪咨皋に対し、彼らを明軍に帰順させ、他の海寇集団を討伐させて罪を免じるように提言したのである。水師把総の武官職を得た許心素が、福建沿海における海防を統括していた福建総兵兪咨皋と結んで、海寇集団の招撫を主導していたことがわかる。

一方で、明軍に帰順してからも、許心素は他の海寇集団とのつながりを強く保っていた。曹履泰『靖海紀略』には、このような海寇たちの動向について詳しい記事が残されている。『靖海紀略』は、曹履泰が天啓六（一六二五）年から崇禎三（一六三〇）年にかけて、福建泉州府同安県の知県の任にあった期間の公牘集である[26]。同安県は、許心素をはじめとする海商／海寇による活動の中心であった漳州湾の北岸にあり、『靖海紀略』には、当時の漳州湾付近の沿海社会や海寇集団の実態が如実に記されている。

天啓六（一六二六）年、曹履泰は福建按察使過廷訓に対し、以下のように上言している。

憂慮されるのは、賊が外にあって、奸物が内部にいることである。兪総兵（兪咨皋）の腹中には許心素があり、許

心素の腹中には海賊の楊六がある。……討伐を転じ招撫を行えば、いずれはそれを利得として、俞咨皋と許心素はそれぞれ私腹を満たし、落着とするだろう。もしこうした招撫が開かれれば、海上の盗賊は楊禄(六)・楊策(七)だけではないのだから、それに乗じて「盗賊行為をして財を得たうえ、さらに官位を得ることができる」と言うだろう。今はまだ招撫の時ではなく、中左所(厦門)の片地はついに虎狼の巣窟となってしまうだろう[27]。

曹履泰によれば、福建総兵俞咨皋は許心素と、許心素は海寇楊六・楊七と癒着していたという。このため許心素の提言によって楊六・楊七を帰順させれば、俞咨皋・許心素が楊六・楊七との癒着を深めて私腹を肥やし、俞咨皋・許心素の本拠である厦門は、海寇の拠点となってしまうというのである。

また、天啓七(一六二七)年ごろには、曹履泰は福建巡撫朱一馮に対しても、「王清と許心素は義兄弟の契りを結び、すでに王清は許心素の船団に加わっている。その船は堅牢にして巨大、果たしてこの船を用いて海賊を討ち、優れた船であると称している。」と上言しており[28]、許心素は福建の海寇である王清とも合流して、その堅牢な巨船を船団に組み入れていたという。同時期に曹履泰は朱一馮に対し、次のような上言も行っている。

楊禄(六)と楊策(七)はともに許心素の根拠地におり、総兵(俞咨皋)が呼び出しても出てこない。聞いたところによると、許心素は兵を集めて自衛し、他の賊もにわかには攻撃できないとのことである。これもまた憂うべきことである[29]。

つまりこの時点で明朝に帰順した楊六・楊七は許心素の根拠地である厦門に駐屯していたが、総兵俞咨皋は十分な統率を行わず、彼らが兵を集めて自衛するに任せているという。許心素や楊六・楊七などの海寇集団は、明軍に帰順してからも、海防当局の直接的な統制をうけたわけではなく、海上勢力としての独立性を維持していたことが窺える。

このように許心素は、明軍に帰順した後も、他の海寇勢力との結びつきを維持し、形式的には明の海防体制に組み入れられていたが、実態としては海上勢力としての独立性を維持していたと思われる。それでは一方、彼は福建南部の沿海地域社会とは、どのような結びつきを持っていたのであろうか。許心素の出身地ははっきりしないが、一説によ

れば、漳州湾に面した泉州府同安県充龍の出身であるという[30]。彼と福建南部の地方官府や郷紳層との関わりを具体的に示す史料は乏しいが、『靖海紀略』には、彼の一族が福建南部の地域社会で、どのような立場にあったのかを示すいくつかの史料が含まれている。

天啓七（一六二七）年ごろ、曹履泰は海道副使周応基に上言して、許心素の子である許基は、当時国子監生であったと述べている[31]。周応期はこの許基を通じて、父である許心素が海賊の討伐に努めるように促している。また崇禎元（一六二八）年には、曹履泰は福建巡撫熊文燦に上言して、許心素の別の子である許一龍は、漳州府学の生員であったとも述べている[32]。許心素の二人の男子は、監生や生員の身分を得て、士人層の一端に連なっていたのである。

ところが許一龍は、生員として漳州府の士人社会とかかわりを持つ一方で、他の海寇勢力と結んで、海賊行為にも関与していたという。曹履泰は許一龍の行跡を、次のように非難している。

巨奸悪種であり、その悪謀は測り難い。李魁奇の契子である葉我珍を引き入れて、多くの仲間を寄せ集め、武器を買い備えているのは、ここ最近の事ではない[33]。

葉我珍とは、福建の有力な海寇であった李魁奇の義子であった人物である。許一龍は彼と結託して、多くの海賊を集め武器を蓄えていたというのである。そして崇禎元（一六二八）年には、許一龍は賊数百を率いて、同安県沿海の土堡を攻撃したが、失敗に終わり逃亡している[34]。

このように許心素の一族は、他の海寇勢力と結びついて海賊行為にも関与していたが、その活動の中心はやはり海上貿易であった。永積氏はオランダ東インド会社史料によって、許心素の弟（名称不明）が生糸を積載して長崎に赴いていたこと、さらに彼はオランダ人だけでなく、台湾北部に駐屯するスペイン人とも取引を行っていたことを指摘している[35]。

ただし、そのなかでもオランダ勢力との密貿易が重要な比重を占めていたようだ。曹履泰は、分巡興泉道蔡善継に対し、次のように報告している。

本職が紅夷を勾引する者を調査していたところ、許心素の勢力が最も大きかった。その一族の許心旭は、許心素の従弟であり、許心蘭の実弟であり、ともに巨奸を勾引している(36)。

これによれば、許心素は従弟の許心蘭・心旭兄弟とともに、台湾のオランダ勢力を漳州湾地域に誘引し、密貿易を行っていたというのである。このため崇禎元（一六二八）年、福建巡撫朱一馮は曹履泰に命じて、許心素たちから不正に蓄えた「贓銀」五千両を追徴させている(37)。

このように許心素の一族は、監生・生員として泉州・漳州地域の士人社会にも連なる一方で、福建南部の海寇勢力と結び付いて海賊行為や密貿易にも関与し、かつ台湾のオランダ勢力を漳州湾方面に誘引して貿易を行い、こうした活動を通じて富を蓄積し、福建南部沿海の地域社会にも影響力を有していたと思われる。総じて許心素は、明軍の将官としての地位、海商／海寇としての独自性、地域社会の有力者としての勢力、という三つの側面を備えていたといえよう。彼は海商としてのネットワークにくわえ、福建海防当局・他の海寇集団・台湾のオランダ勢力、そして福建南部の沿海地域社会とのあいだに、多面的な関係を有していたのである。

二　許心素から鄭芝龍へ――崇禎初年、許心素海上勢力の凋落――

（1）　福建総兵俞咨皋の失脚

前章で検討したように、許心素は天啓年間に李旦の基盤を継承し、さらに明軍に帰順して、福建南部沿海におけるもっとも有力な海商／海寇へと成長するが、彼の海上勢力は、崇禎元（一六二八）年に瓦解することになる。その発端は、天啓七（一六二七）年の、漳州湾における鄭芝龍の海寇集団と、明朝水軍との攻防戦であった。鄭芝龍は李旦の没後、台湾のオランダ商館の通訳を勤めたが、一六二五年ごろには台湾を離れ、その後は福建・広東でしきりに海賊行為を行っ

ていた[38]。福建の海防を統括する福建総兵俞咨皋は、漳州湾において鄭芝龍の海賊船団を攻撃し、許心素は明軍水師把総としてこの攻防戦に参加した。しかし、許心素らは戦闘中航路を喪失して離脱し、明軍は芝龍の奇襲を受けて大敗したのである[39]。この攻防戦において、俞咨皋は鄭芝龍が恭順の意を示したのにもかかわらず戦闘を強行し、大敗を招いたとして非難された[40]。その後も俞咨皋は、鄭芝龍の追撃を逃れて退却を繰り返したようである[41]。

翌崇禎元(一六二八)年正月、漳州府龍溪県出身の工科給事中顔継祖は上奏し、俞咨皋の失策により明朝水軍の大敗を招き、鄭芝龍の勢力が強大化したことを強く弾劾した[42]。この弾劾によって、それまで福建の海防を統括してきた俞咨皋はついに失脚する。

この上奏において、顔継祖は、俞咨皋が行った海寇招撫策を、次のように非難している。

丙寅(天啓六年)における招撫の議とは、実は賊の私産を奪って(俞咨皋の)私産に充てることであり、(俞咨皋は)招撫を懸命に主張していた。この時、巡按御史の周昌晋や布政使・按察使の諸臣は、その無策を怪しんでいた。しかし、当時の巡撫朱欽相は地方の疲弊を憐れみ、軍を動員することを避けたため、俞咨皋の提言を容れ、楊六・楊七を招撫した。……俞咨皋は、海上の賊を招撫してこれを海上に放置し、終始分別も無く、(楊六・楊七らが)商民を劫掠するのに任せたのである。今日招撫して官職を授けたと思えば、明日には海賊行為を行っているのである[43]。

天啓六(一六二六)年に、福建巡撫朱欽相は、俞咨皋の提言により楊六・楊七の海寇勢力を招撫した。俞咨皋に彼らの帰順を働きかけたのは許心素であったことは、前述の通りである。しかし実際には、海寇の招撫はむしろ彼らの活動を助長する結果となり、鄭芝龍との攻防戦においては、「楊六・楊七は(戦闘に)関わらず、傍観していた」だけであったという[44]。

そして顔継祖は、「福建と広東は相互に補完し合っており、広東に危機が及べば福建も安全ではありません。賊がもし順風に乗じて来襲すれば、俞咨皋を拘束して処罰する他に手段は無いと考えます。俞咨皋の罷免を早急に行うべきで

しよう」として、こうした自体を放置すれば、福建・広東一帯に危機的状況が拡大するのを防ぐために、俞咨皋をただちに罷免することを求めたのである[45]。この顔継祖の弾劾によって、俞咨皋は失脚して獄に下され、処分を待つことになった[46]。

（2）「巨奸」許心素の凋落と戦没

天啓年間に許心素が海寇集団やオランダ人との結託を指弾されながらも、水師把総としての地位を維持しえたのは、総兵俞咨皋の庇護があったためであった。しかし俞咨皋の失脚により、許心素もまたその地位を失い、その海上勢力も凋落することになった。

崇禎元（一六二八）年四月、兵部は許心素・楊六らに対する弾劾の題奏を行った。この題奏において、江西道監察御史周昌晋は、「巨奸」許心素の罪跡を次のように糾弾している。

巨奸許心素は、外では海寇と通じ、内では軍情を漏洩し、私的な海上貿易を展開し、紅夷が内海に侵入しても、官兵に問いたださせることもなかった。すなわち俞咨皋の混迷と失敗は、みな許心素が招いたのであり、彼を処刑すべきである[47]。

周昌晋は、許心素は海寇と気脈を通じて軍状を漏洩し、オランダ勢力を誘引する「巨奸」であり、俞咨皋の失策も、ひとえにその配下にあった許心素に由来するとして、彼を厳罰に処することを求めたのである。そして周昌晋は、福建巡撫熊文燦に許心素・楊六らを捕縛させ、彼らを処罰して福建沿海の綱紀を粛正すべきことを強調している。

周昌晋の弾劾は裁可され、崇禎帝は「内地の悪辣な者たちを除かなければ、絶対に外の賊たちを除くことはできない。許心素・楊六らを、巡撫に命令を下して密かに捕らえさせ、法を正して罪を定めるように」との命を下し[48]、これによって兵部は、福建巡撫熊文燦に、許心素・楊六らをすみやかに逮捕・処罰することを指示した[49]。朝廷による許心素・

楊六の逮捕命令をうけて、実際に彼らの追討に当たったのが鄭芝龍であった。彼はすでに崇禎元(一六二八)年正月に明軍に帰順し、水師遊撃（参将の下にあり、遊軍を率いて防御にあたる)の官位を得ていたのである(50)。

鄭芝龍の船団は、ただちに許心素の根拠地である厦門を襲撃した。この結果、許心素は鄭芝龍によって捕縛され、処刑されたようである。許心素の死によって、オランダ人が彼に前貸ししていた四九六二四グルデン余りは回収不能となってしまった(51)。

厦門を管轄する同安県同知の曹履泰は、福建右布政使陸之棋に対して、鄭芝龍の許心素攻撃について、次のように報告している。

許心素が鄭弁(鄭芝龍)に殺害されたのは、伝え聞くに真実のようである。……許心素の次男である許一龍は獄中で死亡し、長男の許楽天は遠方に逃れたようである(52)。

こうして、崇禎元(一六二八)年、許心素は鄭芝龍の攻撃を受けて敗死し、彼の海上勢力は瓦解した。これによって李旦から許心素へと引き継がれた福建南部における海上貿易の実権は、完全に鄭芝龍の手中に移ることになったのである。

許心素は、福建総兵俞咨皋の庇護を後ろ盾として、楊六・楊七などの海寇集団と結託するとともに、福建海防当局とも癒着し、貿易活動を展開するとともに、海賊行為にも関与した。ただしこうした許心素の活動は、多分に俞咨皋の庇護という個人的関係を基盤としており、その意味で脆弱性も孕んでいた。俞咨皋が失脚し、対抗勢力であった鄭芝龍が明軍に帰順すると、政治的庇護を失った許心素の海上勢力はもろくも崩壊したのである。

三　せめぎあう海商／海寇たち
―崇禎年間、福建南部の海商／海寇―

（1） 李魁奇・鐘斌と鄭之龍

鄭芝龍が明軍に帰順した崇禎元（一六二八）年ごろ、彼に匹敵する勢力を保持していた海商／海寇の中に、李魁奇・鐘斌がいる。彼らは時には鄭芝龍の仲間であり、時には鄭芝龍に対抗するため連携し、また時には対立した。この三者間の複雑な相互関係については、張増信氏などが論及しており[53]、三者が福建南部の密貿易活動の実権をめぐり、はげしく抗争していたことが指摘されている。ただし、曹履泰『靖海紀略』には未だ検討されていない関連史料も散見する。そのため本項では、『靖海紀略』の関連記事をできるだけ網羅的に検討し、三者間の相互関係について、時系列的に整理して叙述したい。

李魁奇は、福建泉州府恵安県出身の海商／海寇である。彼は漁船を糾合して、商船に海賊行為を行っていた[54]。ただし、部下それぞれが独自性を保持しており、それほど李魁奇の統率力は強くなかったようである[55]。当初李魁奇は鄭芝龍の仲間であったが、のちに鄭芝龍の軍団から出奔し、独立する。崇禎元（一六二八）年ごろ、曹履泰は福建巡撫朱一馮に対し、以下のように上言している。

> 鄭芝龍の一党は解散し、ついに追及できなかったが、目下約一万人が未だ解散していない。……陳衷紀・李魁奇はそれぞれ異心を抱き、三分の一の船隻を率いて出奔した。海寇李梅宇・陳盛宇らを糾合し、紅夷を引き入れて害を為している[56]。

李魁奇は三分の一ほどの勢力を率いて、芝龍の下から独立した。そして海寇たちと連携し、オランダ勢力と密貿易をおこなっていたというのである。

こうして、李魁奇は鄭芝龍から独立し、鐘斌と合流する。鐘斌は出身地不明の海商／海寇であり、福建南部を中心に活動していた[57]。天啓六（一六二六）年ごろには、許心素の庇護者であった福建総兵俞咨皐から銃六〇門を「給与」され

ており[58]、福建海防当局とのとのつながりが窺える。

ただし李魁奇と鐘斌の連携は、それほど良好ではなかったようである。崇禎二(一六二九)年ごろ、曹履泰は福建巡撫熊文燦に対し、以下のように上言している。

叛賊李魁奇と陳盛宇・周三・鍾斌らは、船団をすでに合流させている。しかしその思惑は一致せず、合流するもすぐに離反しており、間隙に乗ずることができる。先日李魁奇は南澳島の鄭参戎(鄭芝龍)に書状を送り、投降の意を示したようである。また、周三・鍾六(鍾斌)らを捕縛して功績にしようとしている。賊の態度は変幻し、総じて信じ難い[59]。

これによれば、李魁奇は鍾斌らと合流したものの、必ずしも連携が取れているわけではなかった。また、李魁奇は鄭芝龍に書状を送って投降の意を示しているものの、その真意は定かではなく、にわかには信じかたいというのである。

やがて、鍾斌は李魁奇と袂を分かった。崇禎二(一六二九)年ごろ、曹履泰は海道副使徐応秋に対し、「鍾斌は十一月二十七日大鳥船十八隻を率い、李魁奇に叛いて去った。鍾斌の船は本県(同安県)の金門地方に停泊している。徘徊して形勢を視、鄭芝龍に投降を図っているようだが未だ果たせていない」と報告している[60]。つまり、鍾斌は李魁奇のもとを去り、同安県金門島付近に停泊した。さらに、鍾斌は鄭芝龍の下に身を投じようとしているというのである。この両者の離反は鄭芝龍が画策したものであったことを、張増信氏が指摘している[61]。そして崇禎三(一六三〇)年、鄭芝龍によって、李魁奇は撃破された。曹履泰が福建巡撫熊文燦に対して、「実際に鍾斌が先鋒となり」と上言しているように[62]、鍾斌は鄭芝龍の先鋒となって李魁奇を捕縛したのである。

しかし、鍾斌は鄭芝龍とも袂を分かったようである。崇禎二(一六二九)年ごろ、曹履泰は福建巡撫熊文燦に対し、「鍾斌は再び船団を率いて南下した。海寇を追捕すると称しているが、おそらく偽りの理由であろう。この賊は非常に狡猾であり、ついに官軍のために働こうとはしなかったのである」と報告している[63]。すなわち、鍾斌は海寇を追捕すると称し、鄭芝龍の下から出奔したというのである。やがて崇禎四(一六三一)年には、鍾斌もまた、鄭芝龍によって撃破さ

れた[64]。

このように、李魁奇・鍾斌は鄭芝龍とは独立した海上勢力であり、一時的に連携を図っていた。しかし、芝龍の勢力拡大にともない、招撫を受けて彼の傘下に入った。やがて、両者とも芝龍の元を離れたが、明軍に帰属して勢力基盤を拡大していた鄭芝龍によって、相次いで撃破されたのである。

(2) オランダ史料・漢文史料にみえる海商／海寇

鄭芝龍をはじめ、崇禎期の海商／海寇たちの活動は、『バダヴィア城日誌』など、オランダ史料の中にもしばしば記されている。ただし、これらオランダ史料中の海商／海寇たちが、漢文史料中のどの人物に比定できるのかということについては、未だ確固たる定説はみられない。そこで、本項ではオランダ史料と漢文史料を対比し、私見を述べてみたい。検討の対象とするのは、劉香・鍾斌・李魁奇である。

まず、劉香である。林仁川・鄭広南両氏が提唱するように[65]、劉香は、『バダヴィア城日誌』に散見するヤングラウJang Lawであると考えられる。『バダヴィア城日誌』におけるヤングラウの事蹟は、その勢力の強大さや鄭芝龍と対立していたことなど、漢文史料における劉香のそれとよく合致している[66]。さらに、劉香の通称である「劉老」の閩南音はLiu Lau(近代音・現代音Liau Lau)であり[67]、ヤングラウJang Lawの音韻と似通っている。これらの事から、劉香がヤングラウであることはほぼ間違いないだろう。

次に、鍾斌である。鍾斌は『バダヴィア城日誌』・『平戸オランダ商館日記』[68]に散見する、タウツアイラクTou Tsai Lack(『平戸オランダ商館日記』ではトーセイラクと表記)ではないかと考えられる。ただし管見の限り、タウツアイラクについて具体的な漢字名の比定は行われていない。ここではオランダ史料・漢文史料双方を参照し、タウツアイラクは鍾斌であるかどうか検討してみたい。

『バダヴィア城日誌』一六三一(崇禎四)年四月末日条には、タウツアイラクに関して次のような記事がある。

タイオワンより中国ワンカン船一艘当地に着きたり。同船は去る十七日同地を発し、瓦および粗磁器を積み来たれり。同船により、一官(鄭芝龍)が海賊タウツアイラクTou Tsai Lackの艦隊を敗走せしめ、タウツアイラクは一官の手に陥らざらんため、海に投じて溺死せる由を承知せり[69]。

崇禎四(一六三一)年、タウツアイラクが鄭芝龍に敗北し、溺死したというのである。

一方、『崇禎長編』巻四二、崇禎四年正月丙申条には、鐘斌に関して次のような記事がある。

正月二十一日には鄭芝龍は烈当城より出兵し、翌日古雷湾に到着し、鐘斌の船が南澳宮前に潜んでいるのを察知した。芝龍は四鼓(午前一～三時)に兵を分けて進撃し、鐘斌もまた隊を分けて防御にあたった。芝龍の船団が到着して包囲攻撃すると、鐘斌は一隻で外洋に逃亡し、飛ぶように逃げ去った[70]。

崇禎四(一六三一)年正月、南澳島に停泊している鐘斌の艦隊を鄭芝龍が攻撃し、逃亡したことがわかる。さらに『明史』には、鐘斌について次のような記事がある。

鐘斌は当初は招撫に応じたが、のちに再び叛き、福州を襲撃した。(熊)文燦は鐘斌を泉州に誘引し、(鄭)芝龍に襲撃させ、これを破った。鐘斌は外洋に追い詰められ、海に身を投げて死んだ[71]。

『バダヴィア城日誌』と『崇禎長編』・『明史』の記事を対照すれば、タウツアイラクが鐘斌であったことは疑いない。ただし、『バダヴィア城日誌』にいうタウツアイラクTou Tsai Lackと、「鐘斌」の閩南音Tsiong Pin(近代音Tshiung Pian・現代音Tshung Pin)では音韻がかけ離れている。おそらく、タウツアイラクTou Tsai Lackは、鐘斌の通称である「鐘六」を指しているのではないか。「鐘六」の閩南音はTsiong Lak(近代音Tshiung Liau・現代音Tshung Liau)であり、ツアイラクTsai Lackの部分と一致しうる。残るタウTouについては不確実だが、「頭Thau(近代音・現代音Thau)」や「盗To(近代音Mau・現代音Tau)」といった、海寇に関連する呼称に由来するのかもしれない。「頭」鐘六とすれば、音韻の点からも、鐘斌に比定できる。総じて、史料・音韻の点から、タウツアイラクは鐘斌を指していると考えられる

のである。

最後に、李魁奇である。李魁奇は『バダヴィア城日誌』・『平戸オランダ商館日記』に散見する、キチクQui Tsi Cq(『平戸オランダ商館日記』ではクイツィクと表記)ではないかと考えられる。ただし管見の限り、キチクについて具体的な漢字名の比定はなされていない。しかし、『平戸オランダ商館日記』所収「クーンラート・クラーメルの日記」の一六三〇(崇禎三)年一〇月八日条には、クイツィクに関して次のような記事がある。

夕方、会社の銀吹師のシナ人三官の通詞が、我々を訪ねて来た。彼は我々にシナ人から聞いた話を伝えた。即ちシナ人の海賊クイツィクは他のシナ人カピテンに殺され、彼はクイツィクの地位を受継ぎ、トーセイラクと呼ばれる(72)。

これによれば、クイツィクなる海賊がトーセイラクに殺害されたというのである。前述したように、崇禎三(一六三〇)年、李魁奇は鐘斌によって撃破されている。ここで、トーセイラク(タウツアイラク)を鐘斌に、クイツィク(キチク)を李魁奇に比定すれば、記事の内容は漢文史料と合致する。さらに、李魁奇の別名である、「李芝奇」の閩南音Li Tsi Ki(近代音Li Tsi Ki・現代音Li Tsi Tsi)は、キチクQui Tsi Cqの音韻とかなりの程度一致している。これらの事から、李魁奇はキチクであると考えられる。

このように、オランダ史料を漢文史料と対照して検討することにより、従来具体的な比定がなされていなかった、タウツアイラクTou Tsai Lack(トーセイラク)は鐘斌に、キチクQui Tsi Cq(クイツィク)は李魁奇に、それぞれ比定することが可能なのである。

おわりに

一五六〇年代以降、東南沿海では多くの海商／海寇たちが興亡を繰り返し、それらは一六三〇年代後半には鄭氏勢力

へと収斂されてゆくことになる。無論、彼らは単なる海寇ではなく、海商として密貿易を展開し、しばしば沿海社会や海防当局と密接な関わりを持っていた。本稿で検討した、許心素や鐘斌ら崇禎期の海商／海寇たちは、その典型的な事例といえよう。とくに許心素は、一六二〇年代後半に李旦の基盤を継承し、福建総兵俞咨皋の庇護のもとに、福建南部において一定の勢力を構築した。彼は多様な人的ネットワークを有し、相互の利害関係を調整する「ブローカー」的な性格を持っていたのである。

John E. Wills氏は、明末清初の中国沿海地域における商業／軍事的指導者について、彼らが①海商、②仲介者（ブローカー）、③軍事的指導者という三つの性格を兼ね備え、王直・鄭芝龍・鄭成功のように、商業の利潤と艦隊の軍事力を結合させて海上商業／軍事勢力へと成長したことを指摘している[23]。許心素もまた、①海商、②仲介者（ブローカー）、③軍事的指導者、という三つの役割を兼ね備えた、明末期の福建南部における商業／軍事的指導者の一人であった。ただし、許心素の勢力基盤は福建南部に限定され、商業／軍事的なネットワークは比較的限定された海域にとどまっていた。一方で、対抗勢力である鄭芝龍は福建南部にとどまらず、平戸などの九州諸港や台湾のオランダ勢力なども含む、より広範な貿易ネットワークを持っていた。また許心素の海上勢力は、福建沿海の海防を統括していた俞咨皋の庇護に依存する部分が多く、崇禎元（一六二八）年における俞咨皋の失脚によりその庇護を失うと、まもなく鄭芝龍に圧倒されてしまったのである。

一六三〇年代後半には、鄭芝龍は東南沿海における海上貿易の実権をほぼ完全に掌握し、厦門を中心として台湾・日本・東南アジアに及ぶ、広範な貿易ネットワークを形成するとともに、軍事的にも明軍の水師遊撃として明軍に帰属しながらも、実質的にはほぼ自立した海上勢力を築き上げ、許心素のように特定の庇護者に依存する必要性は無くなっていた。こうして、海商／海寇たちがせめぎ合う状況は終焉を迎え、約五〇年間にわたる鄭氏海上勢力の時代が幕を開けることになる。

註

(1) 岩生成一「明末日本僑寓支那人甲必丹李旦考」(『東洋学報』二三―三、一九三六年)。

(2) 永積洋子『近世初期の外交』(創文社、一九九〇年)、同「十七世紀の東アジア貿易」(浜下武志・川勝平太編『アジア交易圏と日本工業化：一五五〇―一九九〇』、リブロポート、一九九一年)。

(3) 林仁川『明末清初私人海上貿易』(華東師範大学出版社、一九八七年)。

(4) 張増信『明季東南中国的海上活動(上)』(中国学術著作奨助委員会、一九八八年)。

(5) 鄭広南『中国海盗史』(華東理工大学出版社、一九九九年)。

(6) 松浦章『中国の海賊』(東方書店、一九九五年)、同『東アジア海域の海賊と琉球』(榕樹書林、二〇〇八年)。

(7) 『バダヴィア城日誌』には、明末東南沿海の海商／海寇についての有用な記事が散見している。本稿では邦訳として、村上直次郎訳注・中村孝志校注『バダヴィア城日誌』全三冊(平凡社、一九七〇～七五年)を用いる。

(8) 『バダヴィア城日誌』一六二五年四月六日条(『バダヴィア城日誌』第一巻、六七頁)。

(9) John E. Wills Jr., "Maritime China from Wang Chin to Shih Lang: Themes in Peripheral History", Jonathan D. Spence & John E. Wills Jr. eds, *From Ming to Ching: Conquest, Region, and Continuity in Seventeenth-century China*, Yale Univ. Press, 1979, pp216-218. 張増信『明季東南中国的海上活動(上)』一三八～一四四頁。永積洋子『近世初期の外交』一三七～一四〇頁。楊国禎「鄭成功与海洋社会権力的整合」(国立政治大学文学院編『中国近代文化的解構与重建』、政治大学文学院、二〇〇三年)二四六～二五一頁。

(10) 楊国禎「鄭成功与海洋社会権力的整合」二四六～二五一頁。

(11) 『バダヴィア城日誌』一六二六年四月九日条(『バダヴィア城日誌』第一巻、八八頁)。

(12) 前掲、『バダヴィア城日誌』一六二六年四月九日条。
(13) 永積洋子『近世初期の外交』一三七～一三八頁。
(14) 兵部題行「条陳澎湖善後事宜」残稿(『明清史料』乙編第七本、国立中央研究院歴史語言研究所、一九三六年、六〇三～六〇七頁)。
(15) 前掲、兵部題行「条陳澎湖善後事宜」残稿。
「旦所親許心素、今在繫」
(16) 前掲、兵部題行「条陳澎湖善後事宜」残稿。
「而又益之以紅毛夷、姦人群而附之、教倭助夷、引夷付倭。夷以所得接済漢物、尽数賄倭。倭復以眈漢物之心、尽力助夷。而夷与倭及海中之寇、合併以成負嵎之勢。」
(17) 俞咨皋は泉州衛の出身であり、天啓五(一六二五)年ごろから崇禎元(一六二八)年にかけて、父と同じく福建総兵を務めている。彼は、同郷泉州晋江出身で当時工部尚書であった呉淳夫という人物の女婿であり、この舅の勢力を後ろ盾にしていたようである(江日昇『台湾外記』巻一「天啓辛酉年至崇禎己卯年共十九年」)。
(18) 前掲、兵部題行「条陳澎湖善後事宜」残稿。
「泉州人李旦、久在倭用事。旦所親許心素、今在繫、誠質心素子、使心素往諭旦、立功贖罪、旦為我用、夷勢孤　図也。」
(19) 前掲、兵部題行「条陳澎湖善後事宜」残稿。
(20) 『バダヴィア城日誌』一六二五年四月九日条(『バダヴィア城日誌』第一巻、六九～七〇頁)。
(21) 岩生成一「明末日本僑寓支那人甲必丹李旦考」一〇四頁。
(22) 永積洋子『近世初期の外交』一三九頁。
(23) 永積洋子『近世初期の外交』一四〇～一五一頁。
(24) 張増信『明季東南中国的海上活動(上)』一四七～一四九頁。

(25) 兵部題行「兵科抄出江西道御史周昌晋題」稿（『明清史料』戊編第一本、中央研究院歴史語言研究所、一九五三～五四年、七六～七九頁）。

「臣於天啓六年入閩、至四月間楊六・楊七横行海上、燒我兵船。正在議剿、而咨臬聽奸棍許心素計、誘之使降、撫臣朱欽相用權宜令殺他賊自贖、臣凜凜憂之。」

(26) 『[乾隆]泉州府志』巻三一「名宦三」、「明同安縣知縣」、「曹履泰」。

(27) 曹履泰『靖海紀略』（台湾文献叢刊第三三種）巻一「上過承山司尊」。

「所慮者、賊在於外、奸在於内耳。兪総兵腹中止有一許心素。而心素腹中止有一楊賊。……而転勦為撫、異日者担得之資、兪与素各各満腹、便可了局矣。第不思此端一開、而海上劇盗独一禄・策也哉。聞風而起、謂作賊得財、並可得官。恐撫未有已時也。中左片地、将終為虎狼之穴矣。」

(28) 『靖海紀略』巻一「答朱撫臺(四)」。

「王清与許心素結契、已坐心素之船。其船堅巨、果用之打賊、尽称利器。」

(29) 『靖海紀略』巻一「上朱撫臺(一)」。

「楊禄与策、俱在許心素家。総鎮提之不出。聞心素招兵自衛。賊亦未能遽攻。是亦可憂之事。」

(30) 楊国禎「鄭成功与海洋社会権力的整合」二四六頁。

(31) 『靖海紀略』巻一「上周際五道尊」。

(32) 『靖海紀略』巻三「上熊撫臺(一七)」。

(33) 前掲、『靖海紀略』巻三「上熊撫臺(一七)」。

(34) 「巨奸悪種、造謀叵測、勾引李魁奇契子葉我珍、聚集散帰夥衆、置造器械、非一日矣。」

(35) 永積洋子『近世初期の外交』一三八～一三九頁。

(36) 『靖海紀略』巻二「上蔡五岳道尊」。

「勾引紅夷者、職素廉其人。而雄長無過於許心素。其族許心旭、乃心素之堂弟・心蘭之親弟也。俱係勾引巨奸。」

(37) 前掲、『靖海紀略』巻二「上蔡五岳道尊」。

(38) 張増信『明季東南中国的海上活動(上)』一三八～一四五頁。

(39) 川口長孺『台湾鄭氏記事』巻之上。

(40) 江日昇『台湾鄭氏始末』巻一「自天啓四年迄順治三年」。

(41) 前掲、『台湾鄭氏始末』巻一「自天啓四年迄順治三年」。

(42) 江日昇『台湾外記』巻一「天啓辛酉年至崇禎己卯年共十九年」。

(43) 前掲、『台湾外記』巻一「天啓辛酉年至崇禎己卯年共十九年」。

「丙寅招撫之議、実傾賊囊以充私槖、敢於孟浪主張。爾時按臣周昌晋及藩・臬諸臣、多訝其非策。而旧撫朱欽相憐地方疲困、不楽観兵、姑聴其言、收楊六・楊七以為用。……而咨臬招之海、仍置之海。首従無分別、商民任劫掠。故今日授撫之職、即明日作賊之人。」

(44) 前掲、『台湾外記』巻一「天啓辛酉年至崇禎己卯年共十九年」。

「楊六・楊七之袖手傍観」

(45) 前掲、『台湾外記』巻一「天啓辛酉年至崇禎己卯年共十九年」。

「閩粤輔車唇齒之勢、粤危則閩不得獨安、賊若再順風為陣、臣必料咨臬之束手無措。此在咨臬之罷斥宜早。」

(46) 谷応泰『明史記事本末』巻七六「鄭芝龍受撫」。

(47) 兵部題行「兵科抄出江西道御史周昌晋題」稿(『明清史料 戊編』第一本所収、七六～七九頁)。

「若巨奸之許心素、外通賊寇、内洩軍情、私貨絡繹於海上、紅夷闌入於内洋、使官兵不敢問、即咨臬之沉迷喪敗、皆其所致、可不正法乎。」

(48) 前掲、兵部題行「兵科抄出江西道御史周昌晋題」稿。

「崇禎元年二月二十五日奉聖旨、這本譚閩事甚悉。不除内地奸宄、則外賊必不可除。許心素・楊六等、着行該撫按設法密擒正法定罪。」

(49) 前掲、兵部題行「兵科抄出江西道御史周昌晋題」稿。

(50) 張増信『明季東南中国的海上活動(上)』一四七～一四九頁。

(51) 永積洋子『近世初期の外交』一三七～一四〇頁。

(52) 『靖海紀略』巻三「上陸鈞修司尊」。

「許心素為鄭弁所殺、向伝以為真也。……而素之次男一龍、斃於獄矣。長男楽天、遠竄久矣。」

(53) 張増信『明季東南中国的海上活動(上)』一五八～一六二頁。

(54) 『台湾外記』巻一「天啓辛酉年至崇禎己卯年共十九年」。

(55) 『靖海紀略』巻二「上熊撫臺(五)」。

(56) 『靖海紀略』巻一「上朱撫臺(六)」。

「鄭寇解散、終不可問。目下約有万人未散。……有陳衷紀・李魁奇各懐異心。船隻叛出者三之一。糾結積盗李梅宇・陳盛宇等。勾引紅夷入内為難。」

(57) 張増信『明季東南中国的海上活動(上)』一五〇～一五三頁。

(58) 『靖海紀略』巻一「上周際五海道」。

(59) 『靖海紀略』巻二「上熊撫臺(四)」。

「叛賊李魁奇与陳盛宇・周三・鍾斌等。聞已合船。然其心参差不一、合亦速離、其間有可乗也。昨聞魁奇投稟於南澳鄭参戎、有投降之説。又聞欲縛周三・鍾六以献功。賊態変幻、総不可信。」

(60) 『靖海紀略』巻三「上徐海道」。

「鍾斌於十一月廿七日駕大鳥船十八隻、叛李魁奇而去矣。斌船泊本縣之金門地方。徘徊観望、似有意投芝龍而未果者。」

(61) 張増信『明季東南中国的海上活動(上)』一五九頁。

(62) 『靖海紀略』巻三「上熊撫臺(二〇)」。
「鍾斌実為先絳」

(63) 『靖海紀略』巻三「上熊撫臺(二一)」。
「鍾斌復領船南下矣。拠称追擒叛党。恐猶是仮説之詞。此賊狡詐百端、終不肯為我用也。李賊嘖頭、時有擒獲。」

(64) 張増信『明季東南中国的海上活動(上)』一六一頁。

(65) 林仁川『明末清初私人海上貿易』一二二頁。鄭広南『中国海盗史』二五四頁。

(66) 『バダヴィア城日誌』一六三四年二月一日条(『バダヴィア城日誌』第一巻、一五七～一五八頁)など。

(67) 音韻に関しては、李珍華・周長楫編撰『漢字古今音表(修訂本)』(中華書局、一九九九年)を参照した。

(68) 『平戸オランダ商館日記』には、明末東南沿海の海商／海寇についての有用な記事が散見している。本稿では邦訳として、永積洋子訳『平戸オランダ商館日記』全四冊(岩波書店、一九六九～七〇年)を用いる。

(69) 『バダヴィア城日誌』一六三一年四月末日条(『バダヴィア城日誌』第一巻、一一〇頁)。

(70) 『崇禎長編』巻四二、崇禎四年正月丙申条。
「随于正月二十一日芝龍自烈当城出師、次日抵古雷湾、偵知鐘船伏南澳宮前。芝龍四鼓分兵而進、鐘賊亦分隊預防、比我舡至、四旁囲攻。鐘斌一舡突出海外、駕走如飛。」

(71) 『明史』巻二六〇「列伝第百四十八」、「熊文燦」。
「斌初亦就撫、後復叛、寇福州。文燦誘斌往泉州、令芝龍擊敗之。既而蹙之大洋、斌投海死。」

(72) 『平戸オランダ商館日記』一六三〇年一〇月八日条(『平戸オランダ商館日記』第一輯、三七七頁)。

(73) John E. Wills Jr., "Maritime China from Wang Chin to Shih Lang: Themes in Peripheral History", Jonathan D. Spence & John E. Wills Jr. eds, *From Ming to Ching: Conquest, Region, and Continuity in Seventeenth-century China*, Yale

東洋史論集三八

Univ. Press, 1979, pp234.